



歌川豊国「和田合戦」

鎌倉樂しむ会 史跡散策資料

『北条義時物語』 (中)

鎌倉幕府の執権制度を確立した男

*参考文献

鎌倉観光文化検定テキスト

武家の古都、鎌倉 山川出版社

承久の乱 文春新書 本郷和人

承久の乱 中公新書 坂井紘一

北条義時 吉川弘文館 安田元久

中世社会のはじまり 岩波新書

五味文彦

一冊でつかむ日本中世史 平凡社

武光誠

鎌倉樂しむ会企画責任者

清藤 孝 編

頼朝のコラム

平安時代の末期、平治元年（1159）十二月に勃発した「平治の乱」、父・義朝に従い平氏と戦い敗れ、頼朝は父と共に鎌倉を目指す。雪の降る中はぐれてしまう。源氏ゆかりの寺の天井裏に匿われ、しばらくして、父・義朝の関係する遊女の長者宅に移る。しかし、間もなく源氏狩りの平宗清に捕らえられ、京の六波羅に送られる。

頼朝は「死にとうない、生きて先祖の菩提を弔いたい」と平宗清に訴える。この嘆願が宗清を揺り動かし、清盛の継母・池禅尼の助命に繋がってくるのです。結果、死を免れ伊豆の蛭ヶ小島に流刑るけいとなった。その時は永暦元年（1160）二月、頼朝は十四才であった。そして、土地の豪族・北条時政と伊東祐親すけちかの監視のもとに置かれた。

頼朝の母は、尾張名古屋の熱田大神宮の大宮司・藤原季範すえのりの娘・由良御前ゆらであり、頼朝は幼少から京の公家社会の中で育った。そして、頼朝の乳母は四人居たと伝わる。その中

の一人・比企尼は頼朝が流刑と決まると平家の目を逃れ、領国の武蔵国比企郷に下向し、ここから、頼朝の流刑時代二十年の間食料を送り続けるのです。

流刑の身の頼朝は、念仏三昧で一日千百回の読経を欠かさなかったという。また、いつの頃からか、京に住まいする比企尼の妹子・三善康信から、月に三度は京の様子を報告を受け取っていた。この時に公家社会の陰謀政治や院政についての知識を学び、後の頼朝の政治姿勢に大いに影響してくるのではないだろうか。

長ずるに従っては、源頼朝が在地武士の工藤茂光としい、土肥実平、岡崎義実、天野遠景、加藤次景かとうじかげかど廉らを従えて、山野を駆巡って、源氏の棟梁とうりやうとしての友好を高めている。馬術においても、その技量は他の追随を許せないほどのものだったという。

その馬術に長けた頼朝が落馬して死に至ったという。俄かには信じがたい事であった。さらには、鎌倉の歴史書と云われる「吾妻鏡」

には、頼朝の落馬事件の前二年間の記載が欠落し、さらには頼朝が亡くなってからの十三年後に、初めて落馬の記載が見えてくる。ここから頼朝の落馬にはいろいろと憶測が出てくるのです。

一例の説として、稲毛重成しげなりの供養の帰途、稲村ヶ崎辺りにさしかかると水平線の向こうから黒雲が勢いよくもの凄いスピードで沸いてきた。同時に大音響の稲妻が発生。そして暗雲の中から、頼朝に滅ぼされ、西海に沈んだ安徳天皇、二位尼時子ちゅうざさや誅殺された義経などの亡霊が次々に現れ、烈風と稲妻に驚いた馬が猛り狂ったように暴れ、頼朝は馬から振り落とされてしまった。これが因で死に至った。

もう一例は、時代は下って江戸時代の話です。徳川光圀公が編纂した「真俗雑談」には、頼朝が深夜暗闇の中、小袖で身を隠し安達屋敷の女のもとに通う時、主人の安達盛長に見つかり、暗闇で盛長は返答を求めたが、黙したので、一太刀浴びせた。小袖を除いてみれば、そこには頼朝が息も絶え絶えになっ

た。そして、頼朝は「落馬したとしておけ」と言つて息を引き取つた。盛長は事の顛末を尼將軍・政子に報告したが、政子は世間知れるとみつもないから「落馬」として公表した。

このように未だ定説が決まらない憶測が多々あるようです。

二代將軍頼家の誕生

源頼朝は度々の生死の境を乗り越え、在地豪族の北条・三浦・和田・千葉・足立・河越・畠山・小山などを御家人に従え、また、公家政治を模倣して、文官として大江広元や三善康信ら京都の下級貴族を呼び寄せ、鎌倉幕府の骨格を作り上げてきた偉大な政治家とみなければならぬ。

この源頼朝の突然の訃報は、御家人の間に衝撃が走つた。将来頼朝を継嗣けいしすべく育てられていた源頼家よりいえは二十一才になっていた。頼

家の乳母は、頼朝の流人時代二十年間食料を送り続けた比企尼の次女と三女であつた。そして、頼家は、殆ど比企家の中で育つた。

比企家では甥の比企能員よしかずを当主に迎え、娘の若狭局を頼家の妻として一幡いちまんという御曹司も育つていた。この御曹司・一幡が将来、頼家に次いで鎌倉幕府の首長となる可能性を秘めていた。

このような状況の下、頼家は鎌倉幕府源氏二代征夷大將軍として、正治元年（1199）正月二十三日就任した。数々の苦境の中を潜りくぐ抜け、京の朝廷と対峙する開闢かいびやく以来初めての武家政権を創り上げてきた父・頼朝に対し、それを嗣ついでいだ頼家への御家人の信頼は、若年で苦勞知らずも相まって、まったくの白紙状態であつたろうと思われる。

初代將軍とともに鎌倉幕府を創り上げた御家人の最大の目的は、自国領地の安堵あんどであつた。頼朝政権下の下でも度々この領地争いが持ち込まれたが、それを頼朝の権威と納得の上で裁いていた。また、少なからず頼朝將軍の裁可には従つていた。この最大の領国裁

可の権限も二代將軍頼家が継ぐことになります。これに対して危機感をつのらせたのが北条政子、時政、義時の親子ではないかと考えられる。

「吾妻鏡」には、頼家が將軍成り立ての頃、早速御家人間の土地の争論があり、その時の頼家の不合理な裁可の幼稚さが書かれている。また、有力御家人の安達景盛が京から連れてきた愛妾を、景盛の留守中に御所に住ませ横取りしてしまふ。あげくの果て景盛を誅殺しようとする。これを聞きつけた尼將軍政子に諫められるということも書かれている。ここで、頼家は暗君であると吾妻鏡は決めてつけているようです。

義時と十三人の御家人

二代將軍に就任した頼家に対し。北条時政は、比企氏の一幡いちまんが將軍を継げば、比企氏が將軍の外戚となり、北条の御家人としての存

在も危うくなると考えたのは当然と思われる。また、在地領主の御家人においては、領国の安堵を二代將軍頼家には任せられないという機運が高まっていた。

初代將軍頼朝時代の北条時政は、將軍の代理としての数々の交渉事を任されることもあったように、頼朝の知謀、陰謀を学び、また、それを実行してきた。その一例として、

頼朝は義経追討問題で、後白河法皇が、義経に強訴され、頼朝追討の院宣いんせんを發したことを逆手さかてに取り、文治元年（1185）、京に時政は派遣され朝廷との交渉を行います。そして、しっかりと守護・地頭の設置を認めさせたほか、京都の治安維持や平氏の殘党狩りなど多岐にわたり仕事をこなし、時政は「京都守護」と呼ばれるほど成果を上げたという。このことから、時政は豪族の武士であると同時に頼朝タイプの政治家であると思われる。

比企家の将来と御家人の領国安堵の不安を解消するためには、どのような策をめぐらせたかという点、頼家が家督を継いで三ヶ月後の建久十年（1189）四月、幕府は十三人の

有力御家人による合議制を導入します。

それは、將軍頼家から、御家人同志の土地の訴訟についての権限を十三人の合議制に移行するということです。

頼家から権力を取り上げた十三人の顔ぶれは、北条時政・北条義時・大江広元・三善康信・中原親能ちかよし・三浦義澄・八田知家・和田義盛・比企能員よしかず・安達盛長・足立遠元・梶原景時・藤原行政であるが、この中、広元・康信・親能・行政らが京都貴族出身の幕府官僚であった。

この合議制が出来たとき、北条義時は未だ三十八才であった。他の十二名は鎌倉幕府以来の功臣で、かなりの年配に達しているのに義時唯一人が三十代の若さで加わっている。この事がなにを意味するかを考えるに、政治的責任のある地位を得たということです。

この事は、政治家義時の政治的生涯の始まりとなり、幕府政治機関の中で次第に重みをなしていく事になります。まさに將軍頼家の出現とともに義時が表舞台に登場してくるのです。

梶原景時の失脚

治承四年（1180）八月豪雨の中、源頼朝は平氏打倒の旗挙げを石橋山に掲げた。北条時政・宗時・義時以下三百騎の兵であった。それに対し平氏軍は大庭景親三千騎、伊東祐親すけちか三百騎であった。数で勝る平氏軍に散々敗れ箱根山中を土肥実平どいさねひらの先導で逃げ回った。洞ほらに隠れ休んでいる時、平氏軍の梶原景時に見つかったが見逃し助けられた。

頼朝と景時の出逢いは箱根山中であったが、真鶴岬から安房に渡り、大返しで鎌倉へ凱旋し、大倉の地に幕府を創設すると、景時は頼朝に帰順し手足となって仕え次第に頼朝の信頼を得ていくのです。

しかし、景時は忠臣であるが故に、他の御家人の些ちかかのミスも頼朝に報告し、時にはその讒言ざんげんにより地位の剥奪や排除が行われ、また、誅殺されることも多々あった。

特に平氏討滅のため、義経軍の参謀として活躍したが、独断専行の義経と意見の合わないことが多々あり、この時の頼朝への報告も

義経排除の一つの因いんとなったという。

その景時は、頼朝の寵臣ちゆうしんの一人であったが、頼朝亡き後、二代將軍頼家の忠臣として仕えることになります。しかし、景時は讒言ざんげんのことから失脚していきます。

ある時、有力御家人・結城朝光しむぎみつが、他の御家人たちの前で「忠臣は二君に仕えずと云うけれど、頼朝様には過分な恩を賜ったが、ここで剃髪ていはつし仏門に入ればよかった・・・」という頼朝追慕つひぼの想いを口にした。聞いた者も涙したという。

ところが。二日ほど経ったある日阿波局あわのつぼね（時政の娘・政子の妹・実朝の乳母）が、朝光に「梶原景時殿が、先日の朝光殿の発言は頼家様に仕える気はない」という意思表示と訴え頼家様の命で朝光を討つことになったということですと伝えた。

この事を聞いた朝光は驚いて、三浦義澄へ駆け込みます。これを聞いた義澄は「景時の讒言により命を落したりした者は数えきれない。代々憤りを持つている者は多い。この段は景時を退治しなければならぬ」（吾

妻鏡正治元年十月二十七日）というと、近い仲間を集めて、景時を弾劾だんがいすることに決め、六十六人の御家人が名を連ねた弾劾状を和田義盛と三浦義澄が提出したのです。

將軍頼家は、景時に「何か申し述べたいことがあるか」と弁明の機会を与えたが、景時は何一つ抗弁せず領国の相模一宮に帰ってしまう。正治元年（1199）十一月のことでした。ひと月ほど経って、再び鎌倉に出仕した景時に「鎌倉退散」の命令が下された。これによって景時は京に行くことを決め一族を纏まとめます。

東海道を一族共々、京を目指していたが、正治二年（1200）正月二十日駿河国の清見関で、待ち伏せしていた御家人・吉川友兼きつかわともかねらと戦闘状態となり、梶原景時とその一族は全滅討ち果ててしまうのです。

後年この景時の滅亡は、北条時政・義時の陰謀ではないかということが浮かび上がります。それは駿河国は北条時政の守護国で、景時一行が上洛することを予測して、時政配下の吉川友兼に命じて討伐に及んだという

ことです。このように北条時政・義時は政敵梶原景時の排除に成功したのです。ここから北条家による陰謀の政治が始まるのです。

比企一族の壊滅

頼朝の二十年間に亘る流人時代、平家の目を逃れ危険をおかして食料を送り続けた乳母の比企尼は、長女を頼朝の側近・安達盛長に、次女を河越重頼しげよりに嫁がせました。三女は源氏一門の最上席である平賀義信ひらがよしのぶに嫁がせています。

そして、比企尼の次女と三女が、頼朝の嫡子・頼家の乳母となります。頼家は実母の北条政子の館ではなく、比企氏の館で育てられました。幼少時から比企家で成長した頼家は、北条家より比企家に親近感を持つのは当然のことと思われる。

また、頼家は比企家の当主・比企能員よしかずの娘・若狭局を妻にしました。頼家との間には

一幡いちまんという嫡男を産みます。

頼朝の不遇時代から支えとなってきた比企氏は、ここで將軍を継げる場に立ったのです。この成り行きは北条時政・義時にとっても穏やかなものではなくなってきた。

次の將軍継嗣問題を憂慮している陰謀家の北条時政・義時は、頼家の権力と比企能員の始め一族の勢力を奪う目的が「合議制の創設」でした。

また、建仁三年（1203）八月、頼家が病に罹り重態になった。これをチャンスとみた北条時政・義時は政子と謀って將軍の権限を二分することを画策した。すなわち時政・義時は、將軍の有する諸国の守護職・地頭職のうち、関西三十八国の地頭職を頼家の弟千幡（実朝）に、全国の守護職及び関東二十八国の地頭職を頼家の嫡子・一幡に譲与させるという計画であった。この時、千幡は十一才、一幡は六才であった。

この計画に真っ向から反対したのは比企能員で、将来は將軍内部の争いの種になると主張した。そして、一幡の母・若狭局をして

建仁三年（1203）九月二日、將軍頼家の病床で、この事を訴えさせた。すぐさま頼家は能員を病床に招き、北条氏追討の談合をした。しかし、これが政子の知るところとなり、直ちに時政・義時に通報された。

ここにおいて時政は、能員を謀殺する決意をかため、能員のもとに使者を遣わし「仏像の祈願と世事のことについて相談したい」と誘い出し、待ち受けていた時政の配下・天野遠景、仁田忠常に忽ち誅殺されてしまう。

そして、政子の命令によって差し向けられた北条義時以下、小山朝政・畠山重忠・和田義盛・三浦義村・加藤景簾らの軍勢に攻められ、比企一族のほとんどは、その日にうちに若君一幡とともに自決してしまふ。ここで時政は最大のライバル比企一族を壊滅することに成功したのです。

二代將軍頼家の暗殺

比企氏一族が滅亡したとき、將軍頼家は奇跡的に快方に向かっていた。嫡子・一幡と比企能員の死を聞いて、大いに時政以下の仕打ちを憎み仕返しを考えた。

そして直ちに和田義盛と仁田忠常に密使を送り、時政追討を命じた。しかし、和田義盛は將軍頼家の命令を拒否し、使者として密書を持ってきた頼家側近の堀藤次親家を誅殺してしまう。さらにこの密書の件を北条時政・義時に知らせる。

一方の仁田忠常は將軍家からの密命を受けたことであつたが、比企家滅亡の一翼を担ったことにより、賞をいただくため北条時政の名越亭に招かれた。供をしていた仁田忠常の従者は、主人の帰りが余りに遅いので、これを怪しみ、馬を引いて帰宅し、忠常の弟五郎及び六郎に告げた。五郎兄弟は將軍家からの密命がもとで、忠常が誅殺されたと推量し、北条に報復するため北条義時の屋敷を襲った。義時は御家人たちを指揮し五郎兄弟を討ち取ってしまう。一方何事もなかった仁田忠常定は、名越亭から自宅に帰る途中、この

件を知り覚悟を決めたが加藤次景簾かげかどに誅殺され、少しの誤解が仁田一族滅亡の運命となつてしまった。

北条氏が当面の政敵であつた比企能員の謀殺に成功したのであるから、ここに背後の後援者を失つて孤立した將軍頼家の存在は、もはや重視するに値しないものとなつた。

仁田氏事件翌日の建仁三年（1203）九月八日、北条時政は、政子と謀つて、病気で政務が取れないとの理由で將軍頼家を出家させてしまいます。さらに、大江広元と相談して、伊豆・修善寺に幽閉してしまいます。修善寺は北条氏の監視しやすい本拠地で、南側は山岳地帯。北条氏の監視の目をかいくぐつて頼家を助け出すのは不可能に近い土地でした。この地は、頼朝の弟で平氏壊滅の功労者の源範頼のりゆきも幽閉され死に追いやられています。翌年、頼家は修善寺で亡くなります。その亡くなる理由の一つに鎌倉時代の史書「増鏡」は、義時による殺害説をとっています。元久元年（1204）七月のことであつた。その時、北条義時は四十二才のことであつた。

三代將軍実朝の就任と

北条時政の失脚

二代將軍頼家の出家と同時に北条氏に擁立された実朝は、建仁三年（1203）九月に征夷大將軍の地位に就いた。その十月八日には、十二才にして元服の儀を行いました。幼年の実朝が実際の政務を執ることはできないので、そこで、後見役として北条時政が実権を握り政務を取り仕切る事になります。これが、鎌倉幕府の執権制度の始まりと考えるのも良いと思います。

従来からの政所まんじころの別当は大江広元の名であつたが、この頃より北条時政も政所の別当としての名を連ねています。

実朝の元服の儀は、時政の名越亭なごえで行われ、大江広元・小山朝政・安達景盛・和田義盛以下百余人の御家人が参集したが、この儀式で北条義時は広元の嫡子・大江親広とともに、雑具持参の役を受け持ち、また、陪膳ばいぜんの役にも侍じしています。元服の加冠かかんの役目は、源氏

一門の長老・平賀義信が、理髪は実朝の外祖父・北条時政がつとめた。

かつて、頼家が將軍に就任した時、北条時政は訴訟裁判における十三人の合議機関を創つた。その構成した中の有力御家人の幾人かは世を去り、今や幕政を左右する力を持つたのは北条氏及び政所の別当大江広元とその一族に限られるようになってきた。

話は前後するが、この実朝の將軍儀式が行われている時の建仁三年（1203）九月は二代將軍頼家が出家させられ伊豆に幽閉され、まだ生存していた。しかし、京の朝廷へは実朝への將軍就任が報告されている。北条時政は六十六才になっていたが、翌年頼家は義時の配下の者に殺害されたとなつている。このようなことから益々北条家による権力の陰謀が深まつていくように思われます。

將軍実朝を擁しての、北条氏による政治が始まつた頃から、北条時政と、義時と政子の間に少なからず意思の疎通が見え始めてきた。その原因の最大なものは、時政の後妻・

牧まきの方かたであった。

北条時政は幼少の実朝を將軍訓育のためか、これまで母政子の許にあつたが、これを北条時政邸に移した。そして、政子の妹・阿波局が守り役としてつとめることとなつた。実朝が時政邸に移つて間もなく、この阿波局が政子の下に来て、実朝が時政の屋敷にゐることは、時政の後室・牧の方が何か企たくらんでいて、実朝に危害が及ぶおそれがあるといふことでした。政子はこの訴えを聞くや直ちに実朝を迎え取ることを決し、北条義時・三浦義村らを遣わし、引き取つてきた。

北条時政の後室牧の方には、数人の娘があつたが、その長女は源氏一門の平賀朝雅とむまねの妻となつてゐた。朝雅の父・義信は、平治の乱（1159）に源義朝に加勢し、敗走し長野・佐久平に逃げ帰つてゐたが、頼朝の挙兵に馳せ参じてゐる。そのため、頼朝は儀式の時には、常に平賀義信を最上席に置いてゐた。そして、実朝元服の時、加冠の役をつとめ、四代將軍の地位に就くことは可能な名門の家柄なの

です。また、平賀朝雅は京都守護職として後鳥羽上皇にも接近し権勢を高めていた。

牧の方はこのような構図を読み取つたのか、また、後鳥羽上皇の意向もくみ取つたのか平賀朝雅を將軍職に就けようと画策したと義時に憶測されたのか、または、義時が陰謀を廻らせたのか、直ちに、父・時政を出家させ、鎌倉から伊豆の領国に追放します。牧の方も京に追放されてしまいます。時政は伊豆の所領で、十年後の建保三年（1215）一月病没します。享年七十六才であつた。

父、時政を失脚させた義時は、次に狙うのは京都守護を務めていた朝雅を討つことです。義時は、京都に使者を派遣します。その日、朝雅は後鳥羽上皇と囲碁を打つてゐたが、急報が入り、自分が討伐の対象になつてゐることを知ります。後鳥羽上皇の御所を退出した処を朝雅は待ち構えていた武士に討たれます。元久二年（1205）七月二十六日のことでした。これで、鎌倉幕府の源氏の一族は足利氏のみが残ることになります。足利氏は北条氏と姻戚関係を結びうまく北条氏との関

係を保つてゐるのですが、後年、この足利氏によつて北条氏は滅亡させられます。しかし、今はその兆候さえ見えない北条氏の勢力が大きくなつていく基礎を義時は創り上げてゐるのです。そして、父・時政から奪い取つた執権の座をしっかりと確立して行くのです。

和田合戦

北条氏のライバル梶原景時は六十六人の弾劾状を以つて倒し、自分よりも強大な比企氏だまを騙し討ちで当主・比企能員ちゅうしちを誅首して、すぐに奇襲をかけ、一族を壊滅に追い込みました。これは北条時政の陰謀に負うところであつたが、その時政も、今度は嫡子・義時に追放されることとなつた。

権力の座について北条義時もまた、自らの権力基盤を強めるため陰謀を巡らせていきます。その次のターゲットは和田一族でした。

建暦三年（1213）二月信濃国住人泉親衡が、前將軍頼家の遺児千手を將軍にすべく、執権義時を討とうとした計画が、事前に発覚し、その一味の安念法師が捕らえられ、義時の下で糾弾された。その結果、和田義盛の子・義直、義重と甥の胤長らの参加が露頭した。これは義時には、和田氏の勢力を失墜させる絶好の機会であった。

鎌倉幕府創設以来、数々の勲功を上げ、侍所別当を務める和田義盛に免じて義直、義重はその罪は免ぜられたが、甥の胤長は此度の陰謀の張本人であるという理由で、義時自ら面罵し、これを禁固し陸奥に流罪と決してしまふ。そして所領は没収され、一旦は義盛に与えられたが、間もなく再没収され、執権義時の手中に帰してしまった。

かくて和田一族は建暦三年（1213）五月北条氏打倒の兵を挙げ立ち上がった。和田勢は百五十人を三手に分けて、御所と義時の館を襲います。和田一族の襲撃と、義時、嫡子・泰時以下の抵抗によって、鎌倉は一大戦場と化した。当初は和田一族の軍勢に劣勢に立つ

ていた幕府軍は、將軍実朝から義盛追討令を手に入れ義時軍は反撃に出ます。これによって、和田勢は分裂し、当主義盛も戦死して、最終的には全滅に追い込まれてしまいます。

このように義時は、実力で北条家の家督を奪い取り、幕府の実権を握り、いままた、幕府を草創期から支えてきた侍所別当の和田義盛を武力で圧倒し潰してしまった。この戦いで名実ともに北条義時が鎌倉幕府のナンバーワンになったのです。

頼朝が関東の武士団を束ね、平家を壊滅に追い込み「武士による、武士のための政治」を鎌倉幕府として創り上げました。その幕府内の血で血を洗うサバイバルの権力闘争に勝利した義時は、頼朝の真の後継者として執権制度を確立させ、鎌倉武士の棟梁となったのです。義時五十一才になっていた。

実朝の暗殺

將軍実朝は十二才で征夷大將軍に就いたが幼少のため、政務は執権義時・政所の別当大江広元が執り幕府運営には関わる事が薄かった。その実朝は歌道・蹴鞠に耽溺するようになっていた。そして元久元年（1204）に京都から坊門前大納言信清の女を妻に迎えてからは、実朝の周りは一層の公家社会がみなぎり、全く公家化した実朝はしきりに官位の昇進を望むようになっていった。こうした事情から、鎌倉武士の將軍実朝に対する信頼関係は次第に失われていった。これは執権政治を確立していく北条義時には、好都合のことでもあったと考えられる。

建保四年（1216）九月頃、実朝がしきりに官位の昇進を望むことに対し、北条義時は秘かに大江広元と相談した上、広元を通して実朝に諫言させ、官位の昇進希望は鎌倉武士から遊離することとなると説き聞かせている。官位の昇進を望んだ実朝は、健保四年六月には権中納言になり、七月には左近衛中將を兼ねた。また、十一月には宋人・陳和卿に唐船を建造させ中国・宋へ行くとする。しか

し、この造船計画は失敗してしまう。このよ
うな行為、また、諫言を聞き入れない態度か
ら、執権義時は実朝がもはや幕府の首長たる
將軍として全く存在価値のないものとなっ
たと認識していくこととなります。

しかも、実朝に子の無いところから、執権
義時に対し御家人たちの間には、將軍の継嗣
について話題とすることが多くなってきた。

執権義時は、この將軍継嗣は京都から皇族
を迎え入れることを考えた。鎌倉武士たちの
間に伝統的な権威をもつ源家將軍の代わり
に、京都から皇族將軍を迎え入れれば將軍を
全くのロボット化することも容易であり、執
権として御家人を統括し得ると考えたので
す。この義時の計画には、政子をはじめ幕府
の主腦者たちの間でも、全く異論がなかつた
という。

そこで、公家側と交渉するため政子自らが
熊野参詣に名をかりて京都に行くことにな
った。建保六年(1218)二月のことであつた。

京都では、後鳥羽上皇の独裁的政治が行わ
れていたのであるが、その宮廷や政界に唯一

人隠然たる勢力をもっていたのが上皇の乳
母・藤原兼子であつた。当時卿二位と呼ばれ
ていた。

義時の意を体して京都に入った政子は、卿
二位との間で交渉した。その結果卿二位は自
分が養育していた上皇の皇子・冷泉宮頼仁
親王を候補することを約したのです。さらに
幕府として、この冷泉宮、と同じ上皇の皇子・
六条宮も將軍継嗣の候補者として考えてい
た。また、政子は京都滞在中の四月十四日に
は従三位に叙せられ、十五日は上皇への拜謁
を要請されたが辞退し京を去つた。鎌倉に帰
つた政子は、十月十三日には従二位の官位を
戴くこととなります。

ところで、官位を希望する実朝に対して、
京都の院当局はその希望に任せ、健保六年
(1218)正月に権大納言、三月兼左大将、十
月内大臣とし、その十二月には二十七才の若
さでついに右大臣に任じられることとなり
ました。この官位の昇叙は、朝廷が実朝を
「官打ち」にするためであつたと云われる。
「官打ち」とは、分不相応な官位の昇進を行

い、その人が官位の重さに負けて、命を縮め
るということであるが、当時は信じられてい
た。

建保七年(1219)一月二十七日、鎌倉幕府
のみならず朝廷をも震撼させる事件が起こ
つた。実朝暗殺です。

この日、実朝は右大臣昇進を神に感謝報告
の儀式に臨むため鶴岡八幡宮を参拝します。
ところが御劍役(実朝の刀を持って随行す
る)を務めるはずだった北条義時が八幡宮の
門に入ったところで、「急に心身が乱れ」、そ
の役を文章博士・源仲章に譲り、小町の館に
帰ってしまいます。

夜になって雪が降り、二尺余り(約六〇セ
ンチ)積もるなか、儀式を終えた実朝が拝殿
を退出し、石段を下りたところを突然、一人
の僧が駆け寄り、剣で実朝を殺してしまつた
のです。このとき、横にいた源仲章も殺害さ
れます。殺害に及んだのは、二代將軍頼家の
遺子・公暁であつた。この公暁は実朝にとつ
ては甥にあたり、鶴岡八幡宮別当を務めてい
ました。

実朝襲撃の際、「父の仇を討ったぞ」と名乗り上げたという証言があり、追っ手は公暁の住持する本坊に向かいますが、そこで僧兵たちと合戦になります。公卿の姿は見えなかったという。

そのころ、公卿は実朝の首を持って現場から逃走していました。食事をするときも傍らに実朝の首を置いたままだったといえます。さらに公暁は、三浦義村に使者を送り、「今、將軍はいなくなつた。私こそが関東の長にふさわしい。速やかに計らうように」と伝えます。義村は公暁に「まずは拙宅にお越しください」と返事をしたあと、すぐに使者を派遣して、執権義時に報告します。義時はためらうことなく、公卿を討つと命じました。こうして三浦勢によって公暁は討ち取られてしまいます。

実朝暗殺の実行犯は公暁ですが、この暗殺劇は余りにも手際よく実行され、単独犯ではなく、公卿をそのかし、綿密に計画されたもので、そして事件の黒幕の存在が何者かと

いう議論が、多くの論者に古くからされているようです。最も疑われるのは、読者の皆さんも感じているように、やはり北条義時の陰謀であろうということです。

事件発生後、三浦義村から報告を受け、即刻公暁の誅殺を命じたのは義時です。また、この三浦義村も黒幕の一人として考えられています。それは義村は、妻が公暁の乳母、息子が公暁の門弟と非常に深い関係にありました。そして、義村は梶原景時の失脚に関わったり、和田合戦では従兄弟の和田義盛を裏切つて、義時側に組したりと、謀略の世界を渡ってきた人物であります。

さらには後鳥羽上皇黒幕説もあるようです。これは天台座主の慈円大僧正の著わした鎌倉時代初期の歴史哲学書「愚管抄」に書かれているようですが、人間は分不相応な高い位を得ると災いが起きる、後鳥羽上皇はそれを狙つて実朝の官位を上げ「官打ち」を仕掛けたものだということです。現代では通用しないかもしれませんが、当時は、天台座主を務めた慈円大僧正でも信じていたのかも

れません。

さまざまな黒幕説があるなかで、やはり北条義時は、この際に一挙に源家の断絶を企て武家政権の確立のためには頼朝の血統を引く者たちを抹殺しなければならなかった。

そして、執権政治を確立し推進していくためには政治家義時としては、血縁関係の情をも捨て切るという人間としての苦衷くちゆうも深かったことであつたと思われる。

かくて、源氏は三代にして終わつた。源家の正統が断絶することによって、結果的には、幕府における北条氏の独裁的地位が確実に強固なものとなつた。

この実朝暗殺事件を契機として、京の朝廷と後鳥羽上皇の秘かな念願「鎌倉幕府の討幕」が、動き出してくるのであつた。そしてこれが強固になつた執権政治と公家政治の激突が、これから始まるのです。

それが「承久の乱」として勃発し、様々な歴史家の先生の論戦の展開が面白いのです。